

第2回 いわき市復旧・復興計画検討委員会 議事要旨

I 開催日時：平成23年 7月25日（月）13：00～16：30
 （現地視察 13:00～15:00、第2回委員会 15:15～16:30）

II 開催場所：市役所本庁舎 第3会議室

III 出席者

1 検討委員会委員（五十音順、敬称略）

職名等		氏名	出欠
筑波大学大学院	システム情報工学研究科 講師	梅本 通孝	出席
東日本国際大学	福祉環境学部 教授	遠藤 寿海	出席
いわき商工会議所	会頭	小野 栄重	出席
福島工業高等専門学校	建設環境工学科 准教授	齊藤 充弘	出席
いわき市立総合磐城共立病院	病院事業管理者	平 則夫	出席
日本大学	副総長・工学部学部長	出村 克宣	欠席
いわき明星大学	科学技術学部 教授	東 之弘	出席

2 事務局出席者

職名等		氏名	
副市長		伊東 正晃	
行政経営部	部長	大和田 正人	
	復興監	前田 直樹	
	次長	阿部 直美	
	行政経営課長	鈴木 善明	
	復興支援室長	園部 衛	
	行政経営課	課長補佐	緒方 勝也
		係長	木田 努
主査		山形 裕之	

IV 次第

○ 現地視察

薄磯地区～豊間地区～江名地区～小名浜港

○ 第2回委員会

1 開会

2 議事

(1) 現地視察に係る意見交換

(2) 復興に向けた基本方針の骨子等の検討

3 その他

4 閉会

V 主な内容

(1) 現地視察に係る意見交換

委員：いわきはいいところだなと思いました。海岸線も様々な表情を持っている。海水浴場があり、地形の起伏が激しいところもあれば、小名浜のように港湾のところもある。復興に当たってはこうした自然条件を存分に活かしたものになればと思う。

海岸部ですぐに裏山になっているところについて、今までは、それが障害になるようなところもあったが、例えば仙台平野のような高台のないところでは、わざわざ津波避難ビルのような高い建物を建てようとしている。そういったところに比べると、うまく整備すれば、津波避難ビルの代わりになる。いまある地形条件について見方を変えて、うまく活用すれば、今までとは違った形になる。

委員：まちが根こそぎなくなったというのは、その地域で暮らす人たちにとっては、辛いことだと改めて思いました。それを思うと今後の復興についての自分の役割についての重さを感じた。

まちの復興には産業の復興が必要である。人の働くところは当然に必要なである。併せて、地域のきずなというものを考えていく必要がある。

委員：本日視察した現場については、これまでも何回も見ているが、今日は海岸線が近くなったという印象を受けた。

高い堤防を築くとか、高台移転などは現実的に難しいと思われる。前回は話に出たが、減災の観点を取り入れて、高台をうまく利用しながら、避難経路を整備するなど、基盤整備を図っていく必要があるだろう。

これからは、新しい産業が生まれるような気がする。何かはわからないが、例えば、漁業などの集約化を図るとか、風光明媚なところは観光地として整備するなど、集約化を図ることができると思われる。こういった集約と防災を兼ね備えた復興を考えていけば、よりよいまちづくりができると思われる。

委員：市内の被害を受けた各所については、6月上旬に見て回ったところである。特に美空ひばりの歌碑とその先が被害の受け方が大きく違うのが驚いたところである。津波の方向の関係であのようになったのだと思われる。

前回も申し上げたが、高台はくずが繁茂している。避難する場所を決めて、きちんと整備しておく必要がある。また、高台へ避難する道を作るのも大事だが、そうでなければ、除草しておくことも大事である。常日頃からいろいろな形で整備しておく必要があるだろう。

委員：いわき市には20年以上住んでいる。今日視察させてもらって、表立って見えるところは復旧が進んでいるという印象を受けた。しかし、産業・生活・教育など、そういったところも含めると、まだまだ時間がかかると思われた。実行対策を進める必要もあるが、確実に計画を立てて、長期プランを練っていく必要もある。急いでやって、とりかえしのつかないことになるよりは、計画を立てて、確実に進める必要があるだろう。とにかくターゲットが広い。何から手をつければいいのかという感想をもった。

委員：今日は波が高かったのかもしれないが、海岸線は以前よりも近くなった。海水浴場を元に戻すのも大変だなと思ったところである。

住みよいところ、安全・安心を確保するにも課題が多いと思われる。放射線の影響さえなければと思うところである。

(2) 復興に向けた基本方針の骨子等の検討について

<質疑>

委員：「安心」はメンタル的なものであって、これを保障するということはできない。「安全」を保障するのであるものと思われる。各自の感じ方の問題があるかとは思いますが、「安全」だけでは駄目なのか。

事務局：「安心」を保障することは行政にとって難しいことであることは認識している。しかしながら、市民が不安に思われていることを可能な限り取り除く努力をすることも行政には求められており、それに向けた姿勢を示すことも重要なことであると認識している。

委員：「原子力災害を忘れず受け入れ」という文言があるが、「受け入れ」というのはどうであろうか。

事務局：前回の委員会での委員の皆様のお言葉を参考にしながら、今回の資料を作成した。前回、「原子力災害は、突然、火山ができたのと一緒であり、そのように考えないとなかなか次のステップに進めない」という発言があり、それを踏まえて、「受け入れ」という言葉を使ったものである。もっといい表現があれば、御協議いただきたいと思う。

委員：市民が「受け入れ」という言葉を見たときにどう受け止めるのか、東京電力を許すという意味にとられないのか。例えば、「現実を直視しましょう」とか他の言葉のほうが良いのではないか。

委員：「受け入れ」が原子力発電になってしまう。「脱原子力」にしても、エネルギーの自立という方向性について、市として対策をどうするかという議論も必要であろう。

「安全・安心」という言葉だが、市ではどのような定義付けで使っているのか。

事務局：多くの市民が「安全・安心」を求めている。「安全」については、異論のないところだと思われる。「安心」は個人がそれぞれ判断する部分ではあるが、市では「安全」はもちろん、「安心」にまで配慮する必要があるだろうということで、一体不可分なものとして使っているところである。

委員：理念であれば「安心」を打ち出すのは良い。市民が求めるのは「安心」であるので、理念としては、それを打ち出して、実際には個々の施策の中で目標を立てて実施していく必要があるだろうと思われる。理念であるので、こういう表現もあってもよいのではないか。

委員：「主な施策」のところで、「経済・産業の再生・創造」のところに医療が入っている理由がわからない。

事務局：医療・福祉については、基本的には「市民生活の再生・安定」のところに打ち出している。「経済・産業の再生・創造」のところにあるのは、医療を産業として見た場合、特に放射線関係の専門機関の誘致などによる、新たな医療分野の付加など、幅広い観点から考えて、産業にも位置付けたところである。

委員：経済というと金儲けの感覚がある。放射能の関係が後々まで続くから誘致ということだと思うが、経済にも産業にもならないのではないか。

事務局：郡山市では、福祉産業が成り立っている。医療・福祉機器などについて、工学系の学校と取組みを進めているところもある。そういった意味での記載だが、表現は工夫したいと思う。

委員：そういったことであれば、正確に医療・福祉機器などと記載した方が誤解がない。

委員：資料2の4ページ以降に記載もあり、ここまで見ると、イメージもしやすいのではないか。

委員：全体的に見て、教育に対してのコメントがない。今日も視察で、復旧していない学校を見ていると、こういったところを早く復旧しなければならないと思ったところである。将来的なことを考えると、教育に対してかなりのウェイトを置いていかなければならないと思われる。

事務局：資料1への教育への記載がなかったため、「市民生活の再生・安定」の項目に修正したい。

委員：最初にある「がんばっぺ！いわき」のキャッチコピーであるが、ビジョンとしてここに載せるべきか。市民は、これ以上何をがんばればいいのかと思うのではないか。メッセージ性が違うように感じる。市民は自分と関係するところを見るものだから、市民に寄り添うものでなければならない。

事務局：復興が長い取組みになることから、市民の中で、短い言葉で視点を同じくできるものとして、これまでも用いてきた「がんばっぺ！いわき」がポピュラーであると判断し、掲げたところである。新たに市民に寄り添う形のメッセージの方が必要ということであれば、委員の皆様でも御協議いただきたい。

委員：前回の委員会で、キャッチコピーとかキャッチフレーズが大事という意見があった。それを受けて今回ここにあげてあるものだから、本委員会でも今後、皆さんと検討していきたいと思う。

委員：復旧・復興は何かを作ったら終わりというものではない。市民の参加が大事になる。そういった面は取り入れてあるのか。

事務局：そういった意味で、視点①にある「オールいわき」は、あらゆる市民が立場を超えてがんばっていこうという意味で取り上げてあるところある。具体的に盛り込むところとしては、「⑤復興の推進にあたって」で盛り込んでいく必要がある。

委員：視点として一番大事なものは、いわきには相双地区から避難してきている人たちがいるということ。そういう人をいわきは受け入れている。これを積極的に受け入れて、復興を進めるべきである。いわきだけの問題ではなく、浜通り地区を再生するためのモデルとしてのいわき市をもっと前に出すべきであると思われる。これにより、いわきの人口を増やす契機にもなればと考える。また、特に原子力を封じ込める件については、あらゆる施策をいわきに持ってくるという視点が必要であると考えます。

委員：「脱原子力」というのは、言うのは簡単だが、相当難しい問題がある。相双地区の人が本当に原子力に反対しているかどうかは分からない。無くなってしまうことに不安を持っている人もたくさんいる。もっと重要なのは、国のスタンスが決まっていけないということ。今後、どうしていくかとの議論は必要であり、感情的に言うのは簡単だが、ビジョンで掲げるのは難しいと思われる。

委員：「新エネルギーの開発」という表現にしていくのはどうか。

委員：脱原発をして、新しいエネルギーの開発というのもなかなか難しい。次世代エネルギーを推進していくという表現のほうが、無難ではないか。

委員：先日テレビで放映されていたが、太陽光やメタンハイドレートというものがあるが、具体的なものに触れないで、表現していく方法もある。

委員：原子力は危険性が高い、ガス等では温暖化の問題が生じる。原発を止めろと言って、温暖化を許容するのかという話にもなる。長期的な視点で、いわき発のエネルギーというのを考えていく必要はある。表現については、やめる方ではなく、何かを作る視点の方がよい。

事務局：原子力に対するスタンスについては、かなりの部分が共有化されていると思われる。原子力の割合が大きく、これを再生可能エネルギーにシフトさせていきたいというのは、皆さん共通の認識ではないかと思われる。県の復興ビジョンの表現を見ると、原子力に依存しない社会の形成であったり、国においても、再生可能エネルギーの利用促進というように表現されている。今後も、国・県の議論を注視していきたいが、市民から見た場合、どのような表現が相応しいのか、委員の皆さんに議論を深めていただきたい。

委員：報道によると、県のビジョン策定では、委員全員一致で、脱原発を取り入れることになったようだ。

委員：先ほど、人口を増やすというような意見があったが、これについて、お聞きしたい。

委員：相双地区の方々の意見を反映させながらビジョンを作る必要性があるのではないか。相双地区の人が入っているという現状から、これと連携していく必要があるだろう。誤解を恐れず言うと、これらの方々に定住していただけるよう、いわきが受入態勢をとることが、安心できるまちづくりにもつながるのではないか。

また、工業団地等についても相双地区の被災した企業に積極的に提供することも必要ではないか。そういったことをアピールできるようにすることも必要である。

委員：スローガンというのは、戦争を経験した世代として言わせてもらうとアレルギーを持っている。がんばる・がんばるというのもどうか。あえて打ち出す必要もないのではないか。

委員：何もないところで、何をどう頑張ればいいのかという思いがある。市民みんなでということであれば、「オールいわき」の方が良いように思われる。住みよいいわきを取り戻そう、新しい人たちも定着しそうなフレーズにする必要があるだろう。

孤独死の問題も懸念される場所である。心のケアが大切である。保健所でメンタルケアをやっていると聞いているが、本当にそれで十分なのか、確認したい。

事務局：委員のお話のとおり、メンタルケアについては、保健師の訪問により行っているところであり、引き続き取り組んでいく。内郷地区の雇用促進住宅では集会所を利用して、2週に1回、サロンという形で交流を行っている。しかし、精神的に不安な方はそういうところにも出てこない。保健師が戸別訪問する中でそういったところも留意していきたい。現在、関係各課で仮設住宅・一時提供住宅に入居している方々への支援について、どのような形が良いのか検討しているところである。

委員：仮設住宅や雇用促進住宅などは、分かりやすいのかなと思われる。それに加えて、ずっといわきに住んでいる人で悩んでいる人への支援もお願いしたい。

事務局：各地区の保健福祉センターで保健師の派遣などを行っているところであるが、今後については、何らかの形での対応を検討したい。

(3) その他（今後のスケジュールについて）

- ・ 第3回委員会については8月5日（金）午後1時30分から実施する。
- ・ 第4回、第5回についても、当初のスケジュール（案）のとおり、8月12日（金）、8月26日（金）に実施することとした。